



# 愛知県陶磁美術館 (セラミウム) 訪問記

中村 忠司

陶磁器が「せともの」と通称されるほど、古くからやきものの生産地として有名な愛知県瀬戸市にある愛知県陶磁美術館を訪れました。愛知県陶磁美術館は、地域に根ざす陶磁文化に関する総合的な文化施設として、1978年に「愛知県陶磁資料館」という名称で開館しました。今年、開館35周年を迎えたことを契機に、6月1日から「愛知県陶磁美術館」と改称し、新たな一歩を踏み出しています。名称変更と同時に愛称を公募し、「セラミウム」という愛称が決まりました。この愛称は、セラミックス、ミュージアム、ミレニアムの3つの語を語源とする造語で、千年余の歴史と伝統を持つやきもの文化発祥の地の美術館として、国内外から愛されたいという願いが込められています。

陶磁美術館の敷地に入ると、その規模の大きさに驚かされます。猿投山麓の緑豊かな自然に囲まれた敷地面積は28万m<sup>2</sup>（東京ドーム6個分）もあり、3つの展示館（本館、南館、西館）、やきものづくりを楽しめる陶芸館、窯跡を公開している古窯館、茶室の6つの建物で構成されています。

美術館のメインである本館には、日本全国のやきものはもちろん、外国陶磁、現代陶芸などが多数展示されています。2Fの常設展では、日本と世界各地の陶磁器が、国別に、地域的・歴史的展開の流れがつかめるように展示されていました（図1）。日本のコーナーでは、縄文式土器から始まり、陶器、磁器を経て現代に至るまでのやきものの歴史を通観でき、大陸から技術を導入しつつ、ゆるやかに独自の発展をしてきた流れや、各生産地の特徴などをあらためて学ぶことができました。B1Fに降りると、雰囲気さがらりと変わり、現代陶芸の数々が展示されていました（図2）。やき



図1 日本やきもの史の展示風景

もの史の博物館から、現代アートの美術館に来たかのような振れ幅の大きさが面白く、奇抜で多様な現代アートの世界をしばし堪能しました。一画には、瀬戸・常滑の陶芸作家の作品を展示するコーナーがあり、地域に密着した県立美術館らしさも伺えました。

敷地の南端にある南館では、美術館色が濃い本館とは打って変わって、やきものが暮らしに関連づけられて紹介されています。子供がやきものについて楽しく学べるよう配慮されていて、「子供向けのやきもの科学館」という印象の展示内容でした。やきものの原料や作り方から、どこでどのように使われているかまでが、非常にわかりやすく解説・展示されているのに加え、自動車関連セラミックス等のファインセラミックスの展示もありました。南館の横には、「碇子の塔」がそびえ立っており、目を惹きます（図3）。開館した35年前、現代のやきもの産業の象徴として南館内に展示する計画だったそうですが、断念して屋外に配置されたとのことでした。

南館の隣にある西館の展示内容は、一風変わっていて、展示品は陶磁の狛犬のみ。猿投古窯の発見者としても知られる本多静雄氏から寄贈されたコレクションで、愛知県から有形民俗文化財に指定されているそうです。大小様々な、表情豊かな陶磁の狛犬たちが、100体以上ずらりと並んでいる様（図4）は、壮観でした。

敷地の西端には、他の建物とは趣の異なる日本家屋、県民茶室「陶翠庵」があります。陶翠庵は、立礼茶席（椅子席）で喫茶を楽しむことができる茶室になっています。陶翠庵では“メニュー”を渡されますが、“メ



図2 現代陶芸の展示風景



図3 碇子の塔の前にて（右から、阿部編集委員，筆者）

ニュー”に載っているのは、人間国宝を始めとする陶芸作家の茶碗の写真（図5）。実際のメニューは和菓子と抹茶のセットのみで、お客さんは抹茶を飲む茶碗を“メニュー”から選ぶ、という趣向です。鑑賞するだけでなく、やきものを「使う」体験もできるというところに、やきものの総合文化施設としてのこだわりを見た気がしました。

敷地の北端にある古窯館では、平安～鎌倉時代（12～13世紀）の窯跡が保存公開されています（図6）。駐車場造成の際に発見された窯跡を、発掘調査の後、上屋を架けてそのまま公開しているというエピソードは、瀬戸の地ならではの、壮大なやきもの史の一端を体験できる巨大な遺跡で、その迫力に圧倒されました。遺跡として公開されている窯跡の他に、屋外では、瀬戸や美濃で使われていた室町時代（16世紀）の大窯（図7）と、江戸時代（19世紀）の連房式登り窯が復元されており、実際に使用されてもいます。

陶芸館は、訪れた人が気軽に作陶や絵付けを体験できる施設です。訪問したのが夏休み中だったので、大勢の子供たちで賑わっていました。時間の都合で体験はできませんでしたが、子供たちが楽しそうに粘土をこねたり、絵付けをしたりしている姿が印象に残りました。

短時間で施設全体を回ったので、全貌をつかみ切れただとは言えませんが、それでも、施設の充実ぶりには

目を見張るものがありました。美術館・博物館的要素、科学館的要素、レクリエーション的要素を兼ね備える、やきもの文化のすべてが詰まった施設だと感じました。あいにく、訪問日は最高気温37℃の猛暑日であったため、散策する余裕はありませんでしたが、気候の良い季節なら、広大な敷地内を散策しながら自然を満喫するという楽しみ方もできると思います。次は行楽シーズンに訪れて、作陶も体験しつつ丸一日過ごしたいと思ひながら、陶磁美術館を後にしました。

取材にあたり、仲野泰裕副館長はじめ、愛知県陶磁美術館のスタッフの方々にお世話になりました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。



図4 陶磁の狛犬コレクションの展示風景



図5 陶翠庵で茶碗を選ぶ阿部編集委員



図6 古窯館で公開されている窯跡



図7 復元された16世紀の大窯



図8 本館ロビーにて（右から、加藤編集委員、筆者、仲野副館長、阿部編集委員）

■筆者紹介 中村 忠司

[連絡先] (株)豊田中央研究所 無機材料研究室 E-mail : e1014@mosk.tytlabs.co.jp

■愛知県陶磁美術館 セラミアム 〒489-0965 愛知県瀬戸市南山口町234番地 TEL 0561-84-7474

URL <http://www.pref.aichi.jp/touji/>

[投稿歓迎－編集委員会では「ほっと」spring欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]